

<症例報告>

血小板減少、低アルブミン血症、免疫グロブリン低下を伴った 脾原発組織球肉腫(S100陽性)の60歳男性例

大阪赤十字病院内科, 病理

宮本悦子、那須 芳、有馬靖佳、
土井章一、新宅雅幸

Primary splenic histiocytic sarcoma with thrombocytopenia, hypoalbuminemia and hypoglobulinemia—a case report.

key words : 組織球肉腫、血小板減少、低アルブミン血症、免疫グロブリン低下

はじめに

脾原発の組織球性悪性腫瘍として、いわゆる悪性組織球症とは異なり、腫瘤性病変として発症し、やや慢性の経過をとる症例を経験したので、既報告例と比較して報告する。

症 例

患者：60歳 男性

主訴：下肢浮腫、血小板減少

既往歴：24歳肺結核、25歳虫垂切除

30歳喘息(脱感作療法にて治癒)

40歳頃より糖尿病に罹患(経口糖尿病薬を内服中)

嗜好歴：特記すべき事なし

家族歴：兄 糖尿病

現病歴：54歳頃より健診にて血小板減少を指摘される。1994年2月、血小板2.9万と低下、近医受診し特発性血小板減少性紫斑病と診断されるが、糖尿病のためステロイド投与は受けず。同時期より下肢浮腫出現し、8月に他院入院、脾臓に直径8cmの腫瘍が認められ(図1)、9月12日に摘脾を施行された。脾は610gで周囲の正常組織と明瞭に区別される腫瘍部分が見られた。組織学的には(図2)、膠原線維で区画された結節状の腫瘍細胞の増殖を認め、細胞は大型で広い細胞質を有し赤血球など

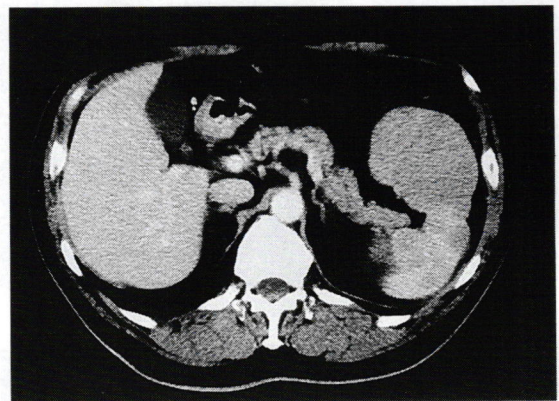


図1 摘脾前の腹部CT
脾臓に結節性の腫瘍を多数認める

を著明に貧食し、核の異型性も強く、組織球系の腫瘍と考えられた。その後直ちに血小板減少、アルブミン減少、免疫グロブリン減少は正常化し、下肢浮腫も軽快した。しかし、再び血小板数が徐々に低下し下肢浮腫も再燃したため、1995年2月本院入院となった。

入院時現症：身長165cm、体重72.5kg、体温36.2度、脈拍 72/分、整、血圧120/68mmHg。結膜に貧血、黄疸なし。眼瞼浮腫あり。表在リンパ節は触知せず。肝は2~3横指触知。下肢浮腫あり。神経学的に異常所見なし。

入院時検査所見：一般検査所見では(表1)、アル